



吉元 一夢 よしもと・ひとむ

株式会社THINX 代表取締役。データアナリスト・統計士・BIコンサルタント・BIエンジニア。文部科学省認定統計士過程修了。現在は、IT企業のシステム開発やソフトウェア開発にアドバイザーとして従事しながら、パチンコホール・戦略系コンサルタントとして活動。

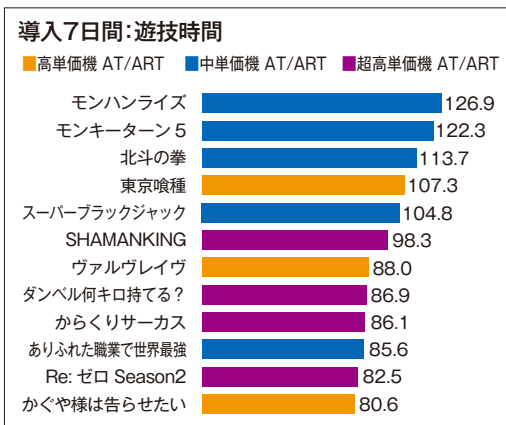


THINX公式LINE

文部科学省 文部科学省認定統計士
221010061

高単価機の常識を覆す新モデル

～パチスロ『L東京喰種』の統計的検証～



©THINX-LAB.OLAP SIS ©SUNTAC「TRYSEM」よりデータ引用

本稿では、パチスロ市場における新機種の市場ポジショニングを定量的に評価し、機種ごとの競争力とプレイヤーの嗜好傾向を明確化することを目的とした。特に、高単価機種は従来、遊技単価の高さゆえにプレイヤーの粘りを引き出しにくいとされてきたが、『L東京喰種』はその通念を覆し、極めて特異な市場動向を示した機種である。

機種分析では、新機種導入7日間のデータを基に、コイン単価を軸としたクラスターリングを実施し、稼働構造・遊技時間・RV(勝ち体験指標)を統計的に評価した。その結果、『L東京喰種』は100分を超える平均遊技時間を記録し、高単価機種でありながらプレイヤーの滞留を促進する特性を示した。

また、長時間遊技者の割合(60分以上の遊技を行うプレイヤーの割合)が60%以上に達し、持続的な稼働を生み出すポテンシャルを有することが明らかとなった。従来の高単価機種はプレイヤーの離脱率が高く、稼働の持続性に課題を抱えていたが、同機はその傾向とは一線を画する結果を示している。

さらに、RVの分析では、高単価機でありながら9736という極めて高い数値を記録し、特に勝ち金額が3万5940円に達するなど、プレイヤーに強い勝ち体験を提供する機種であることが確認された。超高単価機と比較しても十分な競争力を有しており、むしろ超高単価機よりも低リスクで高リターンを実現する設計が、プレイヤーの支持を獲得する要因となっていると考えられる。単にRVが高いだけでなく、遊技時間の長さや持続的な稼働の両立が、同機の競争優位性を決定づける要素である。

加えて、導入後の経過観察データも、同機の優位性を強く裏付ける結果となった。導入から2週間が経過した時点でも、高い遊技継続率を維持し、長時間遊技者割合は55%を超えている。一般的に、高単価機種は時間の経過とともに遊技時間が減少し、稼働が低下する傾向にあるが、『L東京喰種』はその一般的な市場動向に逆行し、安定した稼働を維持していることが明らかとなった。

1人あたりアウトは3710枚と依然として高水準を維持し、他の高単価機種と比較しても顕著なパフォーマンスを示している。また、台あたり遊技人数の増加が確認されており、市場の関心が持続していることを示唆する。特に、空台が発生した際に即座に着座される機種である点は、プレイヤーの支持の高さを如実に示すものである。

総じて、『L東京喰種』は高単価機種の市場において新たな市場価値を創出するポテンシャルを持つことが確認された。従来の高単価機種が抱えていた「粘りにくい」「遊技時間が短い」という課題を克服し、持続的なプレイと強い勝ち体験を両立させる設計が奏功している。

同機の成功は、今後の高単価機種の開発指針に大きな影響を与えるものであり、プレイヤーの心理的満足度と遊技の持続性を両立させることが、今後の市場競争力の鍵となることを示している。高単価機種の新たな基準を示すモデルケースとして、長期的な市場動向を注視する必要がある。

※本研究において、高単価機はコイン単価3.5～4.0円、超高単価機はコイン単価4.0円以上と定義する。